小國神社の歴史

江戸時代（1603～1867 年）、現在の静岡県は伊豆国、駿河国、遠江国に分かれていました。現在の浜松市がある地域は遠江国の一部でした。日本中の他の諸国と同様、遠江国でも神社はその格式に応じて序列がつけられていました。国内で最も格式が高い神社は一宮（「第一の神社」）と呼ばれました。一宮というランクは、その神社の歴史、規模、地元の名家からの支援の量を基にして勅使が授けました。遠江国の一宮は小國神社でした。

小國神社には、江戸時代に統一された日本を支配した徳川幕府の開祖、徳川家康（1542～1616 年）とのつながりもあります。江戸時代よりも前、家康が将軍職を勝ちえる前には、さまざまな有力大名がほとんど常に戦っていました。家康は 1573 年に三方ヶ原の戦いで惨敗したのち、小國神社に立ち寄って参拝しました。家康はしばらくの間ある石に腰かけたあと、進軍を続け、ある城の攻略に成功しました。現在この石は、参拝客がそこに座って挫折から再起する方法を熟考できるよう、入口のそばに置いてあります。